

言葉豊かなる岩手へ

田中 萌

「よぐきたなあ、まんず炬燵さ当だれ」

「みちゅ凍みでねがったが」

正月、雪深い父の実家を訪れ、茶の間の暖かい炬燵に足を差すと、私は親戚一同の花咲く談話に耳をそばだてる。県北の山間、津軽弁その他諸々が渾然一体となった独特の訛りは、どこか優しい味わいを伴い、耳に残る音の濁りがたまらなく心地よい。話が勢い付くに連れまるで異国語のように解しがたくなるその訛りに、私はいつも圧倒され、夢中で聞き入ってしまうのである。

この茶の間に、私が思い描く岩手の未来像がある。それは、豊かな土着の言葉によって構築される、郷土の温もりに満ちた岩手の姿だ。未来を想像する折、そこに息づく言葉に思い及ぶのは、私自身の生活が少なからず言葉そのものと密着しているためであろう。

現在、私は高校の文芸部に所属し、小説や随筆、詩、短歌など、あらゆる文芸創作に没頭する日々を送っている。そして引退を間近にこの二年を回顧し、日ごと岩手への愛着が深まるのを切に感じている。自然豊かな風土の中で五感を研ぎ澄まし、のびのびと言葉に向き合えるこの環境は、手放しがたい宝物だ。この恩恵を噛み締める時、私は、私の編む言葉によって故郷に報いたいと、熱い思いに駆られるのである。

さて、私たちの暮らしに土着の語彙は染み着いているだろうか。私の場合、日常生活の中で方言に触れることは皆無に等しい。学校や私的な場において私たちはごく当たり前に標準語を交わし、知らず知らずのうちに方言から遠ざかっているように思われる。まれに会話の端に飛び出す大人譲りのゆかしい国言葉も、時に異物のごとく一笑を買い、平たい共通語へと改め訳されてしまう。言葉が標準語化されることで活気を失い、岩手から引き離されてゆくのは心寂しい。

「しばれる」という東北特有の一語を「寒い」と置き換えるとき、芯にこたえる岩手の底冷えを表現し切ることは不可能であろう。そして「しばれる」という言葉を忘れ去るならば、同時に私たちは、先人よりこの地に受け継がれてきた「しばれる」感覚そのものに対して一段鈍くなるに違いない。

また、盛岡の学校に通いながら、私は未だ盛岡弁を知らない。京言葉に似てとても美しいという盛岡弁に、私は長らく思い焦がれているのだ。いつか直に触れ、願わくば生身のその言葉を会得したい。

もちろん、方言離れとは対照的な現況もある。豊富な特産品が並ぶ産直屋では、しばしば生きのいい方言が店名に掲げられているし、親しい相手とのメールに「～だべ」「んだんだ」などと訛りを織り込むことも珍しくない。話し言葉として役目を失いつつある方言は、しかし独自のかたちで細々と、私たちの周りに生き続けているようだ。

これ以上言葉を失ってはならない、と私は痛切に実感する。いつか私は、言葉を紡ぐ表現者の端くれとして、作品の中に岩手ならではの感覚、語彙を生かし、刻々と絶えゆこうとする言葉をわずかでも伝え残したい。

さあ今一度、豊かな方言を取り戻すにはどのような術があるだろう。思うに一番の策は、方言の使い手と密に語らうことである。方言の伝承を促すイベントなど、世代を越えた交流の場が活発に設けられれば、自ずと言葉は息を吹き返し、大切に受け継がれてゆくに違いない。いっそ市場や産直など、町中に「方言推進区域」を構えるのも面白い。言語の標準化、均一化とい

う高波に抗うためには、それほどの意気込みがなくてはなるまい。そこにこそ、気高く逞しい文化県岩手の、理想的な実像を仰ぐことができる。地に根を下ろす方言の復活に向け、私は活気あふれる一大プロジェクトの発足を願ってやまない。そして私自身も、その運動の前線で人と触れ合い、これまで以上に言葉のありがたみを実感することができれば幸いである。

さて、新年の数日間を騒ぎ暮らし、私たちは祖母の家を後にする。車の後部座席は煮染めやお餅、そして祖母の畑で穫れた冬の野菜でいっぱいだ。車窓から山奥の冬景色に別れを告げる。広大な田畑と、疎らに建つ家々。ここは田舎である。多少の便利さを欠くものの、ここには温かく実りある暮らしが宿り、独創的な文化が根付いている。私は、今や稀有ですらあるこの田舎の景色に、深い感慨を抱いた。言葉も暮らしも、街並みも、全てが都会化されようとしている今こそ、田舎に育まれる文化、言葉の尊さを再確認したい。それは十年後、私が全霊を傾けて書き綴るであろう一題材だ。私は、愛すべき岩手の姿を一心に書き伝えたい。将来、岩手がより岩手らしく、私たちのただ一つの故郷としてここにあらんことを祈って。

車が山道を抜ける頃、親戚の輪の中にいてすっかり伝染した訛りにふと気づき、思わず顔がほころんだ。こうしてまた私は、言葉の不思議に筆し難い魅力を感じながら、私と岩手との遠からぬ未来に、今日もそっと思いを巡らせている。